

# 論争家としてのミルトン

## —— 監督制批判文書を中心として\*

江野沢 一嘉

1

本稿で取り上げる論題は「論争家としてのミルトン」、それも「監督制批判文書を中心として」という限定づきの議論である。周知のとおり、ミルトンは1641年から1642年にかけて発表した一連の論文のなかで、イギリス国教会の統治方式としての監督制 (episcopacy)、端的に言って、墮落・腐敗した主教 (bishop) が いかにもイギリスにおける宗教改革の実現を妨げてきたかを指摘し、イギリスにおける宗教改革を推進するためには、監督制を廃止し、信徒の総意で選ばれた人格・識見ともにすぐれた人物、すなわち長老 (presbyter) の指導によって教会の改革を実現すべきであるとの主張を展開した。これが「監督制批判文書」(anti-episcopal tracts) といわれるものである。

拙論は、この文書の際立った文体的特徴のいくつかを指摘して、それらがミルトンの古典的教養の現れであると同時に、かれの宗教的信念、端的に言って、プロテスタントに特有な自己正当化癖の反映でもあると見なしうる根拠を提示しようとするものである。そして拙論の末尾では、初期のミルトンの宗教的・政治的思想がイギリス革命の急速な展開の過程で急進化を余儀なくされたことにも触れて、ミルトンのプロテスタント信仰なるものが、終始、不変不動であったとする見解はたんなる謬見にすぎないことを暗示したいと思う。

---

\* この小論は第27回 日本ミルトン・センター研究大会 (同志社女子大学 今出川キャンパス、2001年10月27日) で口頭発表したものである。印刷するにあたって若干補正を施した。[筆者]

「監督制批判文書」の文体的特徴の最たるものは、それらがおおむね「荘重な文体」(grand style)で書かれていることである。ミルトンの叙事詩『楽園喪失』が「荘重な文体」文体で書かれていることは、Matthew ArnoldからChristopher Ricksにいたる批評家の証言をまつまでもなく、周知の事実であろう。<sup>1</sup> そもそも、この「荘重な文体」というのはアリストテレスからクウィンティリアヌスにいたる古典古代の修辞学者たちによって定式化された文体の類型の一つであり、中世からルネサンス期にいたる古典教育のなかで連綿と受け継がれてきたものであった。ミルトンは少年の頃、ロンドンの聖パウロ学校でまず古典修辞学の洗礼を受け、<sup>2</sup> 青年期（ケンブリッジ大学在学中から卒業後の数年間まで）の読書を通じて古典作家のさまざまな文体の技巧を自家薬籠中のものとしたと思われる。

ミルトンの「荘重な文体」は監督制批判文書のどれにも見出されるが、とりわけ *Of Reformation in England* (1641) や *The Reason of Church Government* (1641) に顕著である。「荘重な文体」の見本として、とりあえず *Of Reformation in England* の冒頭の一節を挙げておく。

SIR, — Amidst those deep and retired thoughts, which, with every man Christianly instructed, ought to be most frequent of God, and of his miraculous ways and works amongst men, and of our religion and works, to be performed to him; after the story of our Saviour Christ, suffering to the lowest bent of weakness in the flesh, and presently triumphing to the highest pitch of glory in the spirit, which drew up his body also; till we in both be united to him in the revelation of his kingdom, I do not know

anything more worthy to take up the whole passion of **pity** on the one side, and **joy** on the other, than to consider first **the foul and sudden corruption**, and then, after many a tedious age, **the long deferred, but much more wonderful and happy reformation of the church** in these latter days.<sup>3</sup>

これが「荘重な文体」の見本だと考えられるのは、一連の言葉の配列が一つの完全な文（ペリオドス）をつくり、全体として一種の詩的なリズム感（快感の要因）を湛えていて、論理的にも均整のとれた姿を見せているからである。ここでは詳論を避けるが、「文体」についての古典修辞学者の諸見解については、付録 **Appendix** を参照されたい。<sup>4</sup>

ついでながら、上掲の「荘重な文体」の見本がミルトンの論文の「冒頭」の一節であることにも留意しておきたい。というのは、弁論の冒頭が「主題の導入部」であることは一般に認められている修辞学上の原則であり、主題が崇高な事柄である場合には、導入部からして「荘重な文体」で書かれるのが、いわば自然であり、アリストテレスの言葉を借りて言えば、「適切」であると考えられるからである<sup>5</sup> その観点からすると、*The Reason of Church Government* の「序文」の冒頭の一節も注目に値しよう。

IN the publishing of human laws, which for the most part aim not beyond the good of civil society, to set them barely forth to the people without reason or Preface, like a physical prescript, or only with threatenings, as it were a lordly command, *in the judgment of Plato* was thought to be done neither generously nor wisely. His advice was, seeing that **persuasion** certainly is a more winning, and more manlike way to keep men in obedience than

**fear**, that to such laws as were of principal moment, there should be used as **an induction, some well-tempered discourse**, shewing how good, how gainful, how happy it must needs be to live according to honesty and justice, which being uttered *with those native colours and graces of speech*, as **true eloquence the daughter of virtue** can best bestow upon her mother's praises, would so incite, and in a manner, charm the multitude into the love of that which is really good, as to embrace it ever after, *not* of custom and awe, which most men do, *but* of choice and purpose with true and constant delight. *But this practice we may learn, from a better and more ancient* authority, than any heathen writer hath to give us, and indeed being a point of so high wisdom and worth, *how could it be but we should find it in that book*, within whose sacred context all wisdom is infolded?<sup>6</sup>

『教会統治の理由』と題するこの論文でミルトンは、開口一番、弁論の冒頭には導入部、あるいは序文を置くことが望ましく、しかもその導入部、あるいは序文は人びとを美德に誘うような措辞の美（単なる外面的な装飾ではなく、弁論家自身の心に内在する美德の発現ともいうべきもの）を備えたものであるべきだ、という主張を展開しているのである。プラトンを引き合いに出しているが、かれの本意は異教の作家を引き合いに出すことにあるのではなく、根底にあるのは「すべての知恵が包みこまれている聖なる文脈」、つまり、聖書の本文にこそ求められるべきである、というプロテスタント的信念である。この点に関しては、拙論の後段ですこし立ち入って考察したい。

上記の引用だけでも、散文作家としてのミルトンの真骨頂が 古典主義的教養（とりわけ古典修辞学の教養）と聖書の知識の豊かさにあることを予見させる

に足りるが、かれの論争文書を通読すれば、その予見の正しいことがいよいよ明らかになるであろう。むろん監督制批判文書のなかでも、ミルトンは古典作家および聖書（および教父の著作）についての該博な知識と古典修辞学のあらゆる技法を駆使して論敵に挑戦している。論争家としてのミルトンは古典作家と聖書（および教父の著作）と古典修辞学についての豊富な知識をいわば論争の武器として最大限に活用した、と言っても過言ではないであろう。

ところで、ミルトンの「荘重な文体」が監督制批判文書の際立った文体上の特徴であると言うとき、それは、別名、「キケロ風文体」と呼んでもよかろう。

ミルトンが論争文書のなかで好んで「キケロ風文体」を用いた主な理由は、かれが青年期に耽読した古代の弁論家のなかでもとりわけキケロの法廷弁論、なかんづく例の有名な「弾劾演説」（いわゆる“philippics”）に共鳴するところが多かったからだと思われるが、もう一つ見逃すことのできない理由がある。それは、17世紀前半、同時代の散文作家たちの間で流行していた「反キケロ風文体」<sup>7</sup> —これにはいくつかの変種があるのだが— に対するミルトンの嫌悪、あるいは軽蔑である。この感情は *An Apology for Smectymnuus* (1642) のなかに最も色濃く反映している。ミルトンはホール主教の *Defence of the Humble Remonstrance* (April 1641) に触発されて、なぜ *Animadversions upon the Remonstrant's Defence* (July 1641) 執筆の衝動を抑えることができなかつたかを次のように告白している。

I must confess I took it as my part the less to endure that my respected friends, through their own unnecessary patience, should thus lie at the mercy of a coy flirting style; *to be girded with frumps and curtal gibes by one who makes sentences by the statute, as if all above three inches long were confiscate.*<sup>8</sup>

上の引用文中、「私の尊敬する友人たち」とあるのは “Smectymnuus”、すなわちホール主教の「諫言」が向けられた長老派の牧師たちを指しているが、かれらがホール主教の「内容空疎な、寸足らずの嘲り文句」で飾られた「お上品ぶった、軽佻浮薄な文体」の嘲弄にさらされたままじっと耐えているいる姿は座視するに忍びない、というのが正義の擁護者ミルトンの「弁明」である。文筆家がものを書く場合、「3 インチを越える文はすべて没収さるべし」という法律の定めには違反してはならないと言わんばかりだ、とミルトンは皮肉な口調でこの諫言者、すなわちホール主教の「反キケロ風文体」、端的に言って「セネカ風の鋭角的文体」(style coupé)<sup>9</sup> を槍玉に上げているのである。

じっさい、崇高な目的にふさわしい文体とは、本来、キケロ風の「壮重な文体」であり、その文体を生み出す言語とは、すなわちキケロの「生っ粋のラテン語」にはかならない、というのがミルトンの揺るぎない信念であった。そのことを窺わせる文言が *An Apology for Smectymnuus* のなかに散見される。ここでは、さしあたり二箇所だけ引用しておこう。

*How few among them that know to write or speak in a pure style, much less to distinguish the ideas and various kinds of style in Latin barbarous, and oft not without solecisms, declaiming in rugged and miscellaneous gear blown together by the four winds, and in their choice preferring the gay rankness of Apuleius, Arnobius, or any modern fustianist, before the native Latinisms of Cicero. In the Greek tongue most of them unlettered, or 'unentered to any sound proficiency in those Attic masters of moral wisdom and eloquence.'*<sup>10</sup>

ここで “them” とあるのは、国教会の聖職者を養成するオクスフォード大学やケンブリッジ大学の学生たち、つまり、将来、国教会で要職につくことが約

束されている学生たちを指しているのだが、ミルトンによると、かれらの文学的素養はまことにお粗末で、純粹の文体でものを書いたり、弁じたりする術を心得ている者はごく僅か、文体の諸観念や種類を区別できる者にいたってはさらに僅か、というのである。しかも、かれらのラテン語は野蛮で、しばしば誤用を含み、その演説文はあちこちから寄せ集めたボロ切れを継ぎはぎしただけの代物、かれらはキケロの生っ粋のラテン語よりも、アプレイウスやアルノビウスの派手で粗雑な文章や近代の作家の大袈裟で仰々しい文章のほうをよしとする有様だ。ギリシア語ともなると、道徳的知恵と雄弁を湛えたあのアッテイカの巨匠たちの健全な弁論をかれらは知らないし、学んだことすらないのだ、とミルトンは酷評して憚らないのである。

Another reason, it would not be amiss though **the Remonstrant** were told, **wherefore he was in that unusual manner beleaguered**; and **this was it**, to *pluck out of the heads of his admirers the conceit that all who are not prelatical, are gross-headed, thick-witted, illiterate, shallow. Can nothing then but episcopacy teach men to speak good English, to pick and order a set of words judiciously? Must we learn from canons and quaint sermonings, interlined with barbarous Latin, to illumine a period, to wreathe an enthymema with masterous dexterity?*<sup>11</sup>

この諫言者 [ホール主教]が異例ともいふべき包圍攻撃を受けたのは、かれの取り巻き連中の頭から「高位聖職者以外の者はすべて粗雑な頭腦の持ち主で、愚鈍で無学で浅薄な輩だ」という謬見を打破するためである、とミルトンは主張し、こう借問する。一体、人びとがよい英語を話し、正しい語句を精選し、かつ配列する技術を伝授できるのは監督制以外にないのか？ われわれは野蛮なラテン語で行間注釈を施した聖書正典や説教集から光輝ある完結文（ペリオ

ドス)をつくったり、絶妙な省略的推論(エンテュメーマ)を展開する手法を教わらねばならないのか?と。

どちらの引用文にも、野蛮なラテン語への軽蔑、純粋なラテン語への尊敬、そしてラテン語の代わりに英語を用いる場合、その英語は「よい英語」、すなわち「精選された正しい語句を正しい順序で配列したもの」でなければならない、というミルトンの、いわば文体理念が明瞭に看とれるであろう。

### 3

ここで筆者は、ミルトンのラテン語が後世の、というよりはかれ自身の、英語に及ぼした悪影響(と筆者は考えるのだが)について — したがって、以下の記述はミルトンの文体についての筆者の個人的批判になるわけだが — 若干、私見を述べてみたい。

## 錯綜した文章構造

ミルトンの詩について、ラテン語風の言い回しが問題にされることがあるが、それはかれの散文についても同様に、ある意味では詩の場合以上に、問題にされてしかるべきではないだろうか。問題点の一つは、かれが散文のなかで好んでキケロ風のラテン語の言い回し(語彙もさることながら、むしろ構文)を用いたために、その錯綜した文章構造がしばしば意味の透明性を損ねる結果を生んだ、という点である。その錯綜した文章構造の例としては、*Of Reformation in England*の冒頭の一節から、連綿と続く、しかし単一の文には違いない、次の複々文を挙げるだけで十分であろう。複々文を導く目印としての従位接続詞や同格接続詞をゴチック・イタリック体で、付加語句を導く現在分詞や過去分詞をイタリック体で表示しておく。

Sad it is to think *how* that doctrine of the gospel, *planted* by teachers divinely inspired, and by them *winnowed* and *sifted* from the chaff of overdated ceremonies, and *refined* to *such* a spiritual height and temper of purity, and knowledge of the Creator, *that* the body with all the circumstances of time and place, were purified by the affections of the regenerate soul, and nothing left impure but sin; faith *needing* not the weak and fallible office of the senses, to be either the ushers or interpreters of heavenly mysteries, save *where* our Lord himself in his sacraments ordained; *that* such a doctrine should, through the grossness and blindness of her professors, and the fraud of deceivable traditions, drag so downwards, as to backslide one way into the Jewish beggary of old cast rudiments, and stumble forward another way into the new-vomitted paganism of sensual idolatry, *attributing* purity or impurity to things indifferent, *that* they might bring the inward acts of the spirit to the outward and customary eye-service of the body, *as if* they could make God earthly and fleshly, *because* they could not make themselves heavenly and spiritual; they began to draw down all the divine intercourse betwixt God and the soul, yea, the very shape of God himself, into an exterior and bodily form, urgently *pretending* a necessity and obligation of joining the body in a formal reverence and worship circumscribed; they hallowed it, they fumed up, they sprinkled it, they bedecked it, not in robes of pure innocency, but of pure linen, with other deformed and fantastic dresses, in palls and mitres, gold, and gewgaws fetched from Aaron's old wardrobe, or flamins' vestry; then was the priest set to con his

motions and postures, his liturgies and his luries, *till* the soul by this means of overbodying herself, *given up* justly to fleshly delights, bated her wing apace downward: and *finding* the ease she had from her visible and sensuous colleague, the body, in performance of religious duties, her pinions now *broken* and *flagging*, shifted off from herself the labour of high soaring any more, forgot her heavenly flight, and left the dull and droiling carcass to plod on in the old road and drudging trade of outward conformity.<sup>12</sup>

ミルトンの散文の構造がどうしてもこんなに錯綜しているかということ、最大の原因はかれの完璧主義にあると筆者は考える。まるでミルトンは、思いついたすべての想念を洩れなく一個のペリオドスの中に盛りこまねば気がすまないかのようである。そうだとすると、かれの文章がしばしば冗長の印象を与えるのも当然で、かれの場合、完璧主義が、いわば災いをもたらしたといえよう。論点の一つ一つに長々と引証を加えたり、主要な論点から逸れて枝葉末節にこだわるために、ミルトンの議論はしばしば脱線に陥る。いちばん長い脱線は、細かい活字がぎっしり詰まったOxford Classics 版テキストで延々10ページにもわたっているので、到底、ここで全文を引用するわけにはいかない。ここではその点についての論証は省いて、さしあたり、ミルトンが自分自身の脱線癖を意識していたことを示す証拠として、二、三、比較的短い文を引用するにとどめておきたい。そのなかで脱線部から本論部に議論を引き戻す役割をしている語句をイタリック体で示しておこう。

### 脱線部から本論部への移行を示す語句

*But not to be endless in quotations, it may chance to be objected,*

that there be many opinions in the fathers which have no ground in scripture; so much the less, may I say, should we follow them, for their own words shall condemn them, and acquit us, that lean not on them; otherwise these their words will acquit them, and condemn us.<sup>13</sup>

*I will not run into a paroxysm of citations again in this point, only instance Athanasius in his forementioned first page: 'The knowledge of truth,' saith he, 'wants no human lore, as being evident in itself, and by the preaching of Christ now opens brighter than the sun.'*<sup>14</sup>

But *to return whence was digressed:* seeing that the throne of a king, as the wise King Solomon often remembers us, 'is established in justice,' which is the universal justice that Aristotle so much praises, containing in it all other virtues, it may assure us that the fall of prelacy, whose actions are so far distant from justice, cannot shake the least fringe that borders the royal canopy; but that their standing doth continually oppose and lay battery to regal safety, shall by that which follows easily appear.<sup>15</sup>

つぎに、例の、とびぬけて長い脱線部のなかで個々の脱線を導入する目印しの役割をしている語句（その語句のみ）を太字イタリック体で示しておく。

### 本論部から脱線部への移行を示す語句

*For me* I have determined to lay up as the best treasure, and

solace of a good old age ... the honest liberty of free speech from my youth.... *For* if I be either by disposition, or what other cause too inquisitive, or suspicious of myself and my own doings, who can help it? *but this* I foresee, that should the Church be brought under heavy oppression, and God have given me ability the while to reason against that man that should be the author of so foul a deed, or should she..., what stories I should hear within myself, all my life after, of discourage and reproach.... These and such-like lessons as these, I know would have been my Matins duly, and my Even-song. *But now* by this little diligence, mark what a privilege I have gained;...when others that have ventured nothing for her sake, have not the honour to be admitted mourners. *But* if she lift up her drooping head and prosper....<sup>16</sup>

以下、延々と、というか、だらだらと、ミルトンは、自分がなぜ、いわば「左手を用いて」でも、監督制批判の論争に加わらずにはいられない心境になったかを弁明する。この脱線癖が、徹底した引証への嗜好と相まって、ミルトンの論争文をしばしば冗長で、退屈なものにしている二大要因ではないかと筆者は考えるのである。

#### 4

ところで、筆者は、前節でミルトンの監督制批判文書はおおむね「荘重な文体」で書かれているという事実を指摘したのだが、それだけではたぶん片手落ちのそしりを免れないだろう。というのは、かれは、他の種類の文体、たとえば「平俗な文体」(plain style)についても、場合によっては、その効用を認めていると思われるからである。じじつ、かれはしばしば「平俗な文体」を格調

高い「荘重な文体」のなかに、いわば織り混ぜて用いている。どんな場合に「平俗な文体」が最も顕著に見出されるかということ、論敵からの誹謗・中傷に対して自己の潔癖を「弁明」する場合とか、「誹謗には誹謗を、中傷には中傷を」もって論敵を罵倒する場合である。たとえば、次の文章をご覧いただきたい。修辞的装飾を凝らした「荘重な文体」とは違い、罵詈雑言に満ちた「平俗な文体」で書かれていること、およびその罵詈雑言が齒に衣を着せない激越な調子で書かれていることに読者は一驚するであろう。

[But] why do we suffer *misshapen and enormous prelatism*, as we do, thus to *blanch and varnish her deformities with the fair colours*, as before *of martyrdom*, so now *of episcopacy*? They are *not* bishops, God and all good men know they are not, that have filled this land with late confusion and violence; but *a tyrannical crew and corporation of imposters*, that have blinded and abused the world so long under that name.<sup>17</sup>

「奇形の大怪物と化した高位聖職者の支配体制」が「昔は 殉教という、いまは 監督制度という厚化粧でその醜悪な顔を真白く塗りたくっている」というのはミルトンの想像力が生み出した〈厚化粧をした醜女〉のイメージである。擬人法という名で知られる修辞的装飾である。さらにまた、ミルトンは主教たちを「暴虐的なペテレン師集団」と口汚ない言葉を用いて罵ってもいるのである。

これらの誹謗的な人身攻撃は、今日の私たちの感覚から言えば、ほとんど名誉毀損に等しいと思われるかもしれない。しかし、古典修辞学者たちは、この種の「倫理的修辞」を弁論の一類型、すなわち「誹謗的弁論」においては、推奨されないまでも、許容はされると判断していたし、古来、雄弁家として知られる論争家が同じ手法で論敵を攻撃した例は珍しくない。たとえば、有名なキケ

口の「弾劾演説」にも、トマス・モアの「反テインダル」論争、あるいは「反ルター」論争にも、この種の「倫理的修辞」の濫用が見出されるであろう。それゆえ、ミルトンが「目には目を、歯には歯を」の精神で、論敵を激しい言葉で誹謗したとしても、そのこと自体は異とするに足りないのである。

## 5

論争家としてのミルトンを考察する場合に注目しなければならないのは、むしろ、かれが自分自身の「誹謗的弁論」を正当化した、その理由づけである。一見したところ、理由は二つあるように見える。一つは、かれの「誹謗的弁論」は、自分自身の利益、つまり私利私欲のためでなく、かれが信奉する宗教、すなわちプロテスタント信仰の擁護という大義名分のためである、というものである。そのことを、ミルトンは *Of Reformation in England* のなかで次のように弁明している。

And here withal I invoke the Immortal Deity, revealer and judge of secrets, that *wherever I have* in this book plainly *and* roundly (though worthily *and* truly) *laid open* the faults and blemishes of fathers, martyrs, or Christian emperors, or *have* otherwise *inveighed against* error *and* superstition with *vehement expressions; I have done it neither* out of malice, nor *list to speak* evil, nor any vainglory, but of mere necessity *to vindicate the spotless truth from an ignominious bondage*, whose native worth is now become of such a low esteem, that she is likely to find small credit with us for what she can say, unless she can bring a ticket from Cranmer, Latimer, and Ridley; or prove herself a retainer to Constantine, and wear his badge.<sup>18</sup>

教父たち、殉教者たち、キリスト教徒である皇帝たちの「欠陥や汚点を明確かつ徹底的に（むろん正当で真摯な意図から）暴露したり、激しい表現で誤謬や迷信を非難した」のは、なにも「その人びとを悪しざまに中傷する意図で妄言を弄する」のではなく、ひとえに「汚れなき真理を恥ずべき束縛から守らねばならない」との義務感から、いわば そうせずにはいられないからだ、というのである。ここにミルトンが罵詈雑言を正当とする一つの理由がある。

もう一つの正当化の理由は、イエス・キリストご自身が「誹謗的弁論」を許容している、というか、むしろ要求しているというものである。両者は表面的には別個な理由のように見えるが、究極的には同一の原因（＝神のみ旨）に帰せられると見てよかろう。ただし、ミルトン自身はこの理由づけを本文中の別な文脈のなかで別個に行っているので、ここでも別々に引用することにしよう。

[But] when I discerned his intent was not so much to smite at me, as *through me to render odious the truth which I had written, and to stain with ignominy that evangelic doctrine which opposes the tradition of prelacy*, I conceived myself to be now not as my own person, but as a member incorporate into that truth whereof I was persuaded, and whereof I had declared openly to be a partaker. Whereupon I thought *it my duty, if not to myself, yet to the religious cause I had in hand, not to leave on my garment the least spot or blemish in good name*, so long as God should give me to say that which might wipe it off; *lest those disgraces which I ought to suffer, if it so befall me, for my religion, through my default religion be made liable to suffer for me.*<sup>19</sup>

こうしてミルトンは 諫言者 [ホール主教] の意図が「私に対して罵詈雑言を

浴びせる」ことにあるというよりは、むしろ「そうすることによって、私の主張する真理に悪臭を漂わせる」ことにあるのだと喝破するのだが、そのとき、ミルトンは「自分の衣服になすりつけられた不名誉なシミやキズを拭き落とす」こと（＝自己正当化）を神がお許しになるなら、その限りにおいて「そうすること（＝自己正当化）は、たとえ私自身に対してではないにしても、私が手中におさめた宗教上の大義名分に対しては、義務である」と弁明するのである。

さらにまた、真理を証しすべき時に沈黙するのはキリスト教徒には許されざる怠慢である、というのもミルトンのプロテスタント的信念であった。その点に関するかれの弁明は *An Apology for Smectymnuus* にも *The Reason of Church Government* にも見られる。

I had no fear, but that **the authors of Smectymnuus**, to all the show of solidity which the Remonstrant could bring, were prepared both with skill and purpose to return a sufficing answer, and were able enough to lay the dust and pudder in antiquity, which he and his, out of stratagem, are wont to raise. But when I saw his weak arguments headed with sharp taunts, and that his design was if he could not refute them, yet at least with quips and snapping adages to vapour them out, which they, bent only upon the business, were minded to let pass; by how much I saw them taking little thought for their own injuries, I must confess I took it as my part *the less to endure that my respected friends, through their own unnecessary patience, should thus lie at the mercy of a coy flirting style...*<sup>20</sup>

「スメクティムニューアス」たちが「諫言者」の「小賢しい、嘲り」にさらさ

れながらも、これを甘受し、あえて反駁せずにいるのをミルトンがいかに齒がゆく思っていたかが上の引用文から窺われるが、ミルトンに言わせると、かれらの沈黙は「不必要な忍耐」以外の何物でもない、というわけである。不正を見て見ぬふりをしていられないミルトンの、いうなれば「正義の感覚」がよく現れている箇所である。

不正を目撃しながら真理を証ししないのは キリスト信者としての良心が麻痺しているか、あるいは怠慢であるか、いずれにしても神のお咎めを免れない、とミルトンが信じていたことは、*The Reason of Church Government* の脱線部のなかの長い弁明を見ても明らかである。

Timorous and ungrateful, the Church of God is now again at the foot of her insulting enemies: and thou bewailest, what matters it for thee or for thy bewailing? ... God listened if he could hear thy voice among his zealous servants, but thou wert dumb as a beast.... Dare not now to say, or do anything better than thy former sloth and infancy, or if thou darest, thou dost impudently to make a thrifty purchase of boldness to thyself out of the painful merits of other men: what before was thy sin, is now thy duty to be, abject and worthless.<sup>21</sup>

ここではミルトンは、教会の危機に際会して、もし自分が敢然として真理を証ししなければ、神からどんなお咎めを受けるだろうか？ と神と自分とが対面している場面を想像しながら、いわば自問自答している。

誹謗する相手には（誹謗し返してでも）自己の信念の正当性を主張する—これがミルトンの「アポロギア」、すなわち「弁明」の精神であった。そのことは、

さきに引用した *An Apology for Smectymnuus* の一節 (55-56) から明らかである。もっとも、かれは自らの「アポロギア」の正当性を主張するにあたって、「神がお許しになるならば、その限りにおいて」と一定の限定をつけているが、どういう場合に「神がお許しになるか」については、一言も述べていない。プロテスタントの信者は一般に、神の意志は聖書に啓示されている、そして、聖書に啓示されているかぎり、それは神の意志である、と主張する傾向があるが、これは一種の循環論であって、プロテスタント信仰に懐疑的な人びとにはひとりよがりの印象を与えかねないのではないか。偏見のそしりを免れないかもしれないが、筆者はこれを「プロテスタント的独善性」と呼ぶのである。ミルトンにもその傾向が窺われることはいうまでもない。その点については、以下、節を改めて考察する。

## 6

筆者は、先ほど、ミルトンがかれ自身は古典教育で養われた「壮重な文体」に対する偏愛を持っているにもかかわらず、論敵から浴びせかけられる誹謗に対して誹謗で応酬する場合や、教会のあるべき規律に対する不正や歪曲を糾弾する場合には、あえて「平俗な文体」を用いることも辞せずという態度で、いわば対極的な二つの異種の文体を意識的に使い分けている事実を指摘した。が、不思議なことに、ミルトンは聖書の本文がどんなに無学で無教養な人びとにも容易に理解できる、いうなれば「平俗な文体」で書かれていることには何の疑問も抱いていない。それどころか、むしろこれを当然視しているのである。聖書の真理はこれを信じる者には正しく理解できるはずである、との前提を無条件で受け入れているからだろう。これはミルトンに限らず、おそらくすべてのプロテスタント信者が共有している信念であろうと筆者は思う。しかし、ここでは 監督制批判文書に限定して、ミルトン自身の信念の表出と見られる箇所のみを引用しておこう。

The very essence of truth is plainness and brightness; the darkness and crookedness is our own. **The wisdom of God** created **understanding**, fit and proportionable to truth, the object and end of it, as the eye to the thing visible. If **our understanding** have a *film of ignorance* over it, or be blear with gazing on other false glisterings, what is that to truth? If we will but purge with sovereign eyesalve *that intellectual ray which God hath planted in us*, then we would believe **the scriptures protesting their own plainness and perspicuity**, calling to **them** to be instructed, not only **the wise and learned**, but **the simple, the poor, the babes**, foretelling an extraordinary effusion of **God's Spirit** upon every age and sex, attributing to all men, and requiring from them the ability of searching, trying, examining all things, and by the Spirit discerning that which is good; and as the scriptures themselves pronounce *their own plainness*, so do the fathers testify of them.<sup>22</sup>

神の知恵は、本来、すべての人びと（学識ある賢者であると、無学で無教養な者、貧者、赤子であるとを問わず）に理解力をお与えになったが、われわれの眼が膜で覆われると、ものがよく見えないように、理解力が無知の膜で覆われると、真理が見えない。この無知の膜を除去するのが神の霊、すなわち聖霊の働きである。それゆえ、われわれ人間の側でこの聖霊の働きを受け入れる、すなわち信仰するならば、どんな無学の者にも聖書は正しく理解できるはずだ、という理屈である。

監督制批判の理論的根拠として、ミルトンがしばしば聖書（ときには教父）を引用するのは、究極的にはこの信念にもとづくものと解してよかろう。しかし、ミルトンの聖書引証については、疑問の余地なしとしない。たとえば、同じ事

柄について二つの対立する立場があり、ともに聖書にもとづく立論が可能な場合、ミルトンは一方を排し、他方を採用することがままある。しかも、その選択はしばしば独断的、恣意的でさえある。

But more indignation would it move to any Christian that shall read Tertullian, terming St Paul a novice, and raw in grace, for reproving St Peter at Antioch, worthy to be blamed, if we believe the epistle to the Galatians.<sup>23</sup>

アンチオケで聖ペテロが異邦人と食事を共にしているのを見咎めた聖パウロが「おまえはユダヤ人のくせに異邦人と同じような生活をしているではないか。そんなことでは異邦人をユダヤ人のように生活させることなど、できるわけがないではないか」と詰問したことは「ガラテア人への手紙」に明らかである。この聖書の記述にもとづいてテルトリアヌスが聖パウロを「信仰の未熟者、無骨者」呼ばわりしたとしても、それはテルトリアヌス個人の聖書解釈にすぎまい。ミルトンが同じ箇所を解釈して「聖ペテロが非難を受けて当然」と考えるのは自由だが、「テルトウリアヌスを読むキリスト教徒はだれしも怒りを感じるであろう」と結論するにいたっては、これはもう、聖パウロびいきのひいきのひき倒しではないか？ そう思わざるをえないのである。

ミルトンの「引証」の選択もまた独断的・恣意的であるとのそしりを免れまい。その例として、次の箇所を挙げておこう。

But not to be endless in quotations, it may chance to be objected, that there be **many opinions** in the fathers *which have no ground in scripture; so much the less*, may I say, **should we follow them....**<sup>24</sup>

それまでこれでもかこれでもかと言わんばかりに教父たちからの引用を重ねてきた後、教父たちの意見のなかにも聖書に根拠をもたない意見がたくさんあるではないかとの反論が出ると、突如、「さよう、だからこそかれらのそういう意見に追従すべきではない」などと平然と答えるミルトンの神経は、一体、どうなっているのだろうか？ ここにも、聖書に根拠をもたない教父の意見など、取るに足らないとするミルトンの（あるいはプロテスタントに共通の）独善性の匂いを嗅ぎとることができよう。

どんな論争にも、ある程度の我田引水的な議論はつきものである。それゆえ、上の引用に見られるミルトンの恣意的な引証のしかたも目くじらを立てて異議を申し立てるほどのことではないかもしれない。しかし、一步ゆずって、ミルトンが聖書に根拠をもたない議論はすべて誤りであるとの立場から監督制をいわば目のかたきにしたのは当然だとしても、同じ根拠からかれが長老制を支持していた事実は見逃せない。というのは、監督制を批判していた時点では、長老制こそが聖書に根拠をもつ、したがって、神のみ旨にかなう唯一の統治方式であることをミルトンが信じて疑わなかったのは事実であり、しかもその事実の重大な意味はこの信念がやがて大きく揺らぐことになったときに露呈せざるをえなくなるからである。その点に関する論証は拙論の範囲を超えるので割愛するが、重要なのは、ミルトンの独善的思考がいかにかれを誤った判断に導きうるかという点に関してかれが盲目であったことである。革命の急激な進行過程でかれは長老制の廃棄を、さらには王権の否定を、余儀なくされたので、その意味ではミルトンは変節した、と言えなくはないのである。そのことがミルトンにとって苦渋に満ちた経験でなかったはずはないと筆者は考えるのである。

さて、筆者に残された仕事は、上に述べた私見を立証することである。まず、初期のミルトンが教会統治方式としての長老制を是とし、監督制を非としていたことについては、そのことを主張するのがかれの監督制批判文書全体の趣旨である以上、ここに贅言するまでもないが、かれの主張が比較的明瞭に行われている箇所を、二、三、引用してみるのも全く無意味というものではなからう。

He that, enabled with gifts from God, and the lawful and primitive choice of the church assembled in convenient number, faithfully from that time forward feeds his parochial flock, has his coequal and compresbyterial power to ordain ministers and deacons by public prayer, and vote of Christ's congregation in like sort as he himself was ordained, and is a true apostolic bishop.<sup>25</sup>

「神のたまものにめぐまれ、適度の数の教会員のなかから、合法的かつ原始時代の純粹さで選ばれた以上は、以後ずっと忠実に教区の人びとのために献身する」ような人物 — そういう人物こそが牧師や執事たちを「かれ自身と対等な立場に立つ長老として、かれ自身が任命されたのと同じ仕方で、すなわちキリストの会衆の祈りと投票にもとづいて」任命する権限を持つのであり、そういう人物こそが「真の使徒的主教」である、とミルトンは言うのである。

ミルトンが衷心から希求してやまないのは、聖なる使徒が全教会にあまねく任命した「忠実な牧師」たち、すなわち「長老と執事」たちによる統治方式に英国が服従することであり、その心情をかれは *The Reason of Church Discipline* のなかで次のように吐露している。

I shall in the meanwhile not cease to hope through the mercy and grace of Christ, the head and husband of his Church, that England shortly is *to belong, neither to See Patriarchal, nor See Prelatical, but to the faithful feeding and disciplining of that ministerial order,* which the blessed Apostles constituted throughout the Churches: and this I shall essay to prove can be no other, than that of **Presbyters and Deacons.**<sup>26</sup>

8

教会統治方式としての長老制をミルトンが支持していたことは以上の引用でほぼ完全に明らかにされたと思う。長老制というのは教会組織に関する事柄で、国家のあり方、すなわち国制とは、概念上、区別されるべきものであるが、筆者はさらに、この時期、かれが王制を是認していた事実にも注目したいと思う。それというのも、長老制と同様に、王制の成り立ちについても聖書に典拠を求めることができるからである。それゆえ、ミルトンが王制を是認していたこと自体は別に異とするに足りないのだが、やがてかれは、王制にも批判の目を向けることになるのである。そして、この点も意味深長だと筆者は考えているのである。ともあれ、ミルトンが監督制批判を行っていた時点で、かれがどんな国家観を抱いていたかをまず見てみよう。端的に言って、それはキリスト共同体としての国家と教会の一致と言ってもよいであろう。

当時、ミルトンの脳裏に深く刻みこまれていた観念としてのキリスト共同体とは、キリスト教（カトリックを除く）を信奉する王、人格・識見ともにすぐれた高貴な精神をもつ指導者、および人民からなる共同体であった。その三つの構成要素のうち、人民とは一般のキリスト信者のことであり、人格・識見ともにすぐれた高貴な精神をもつ指導者とは長老（presbyter）・執事（deacon）な

ど、一般に牧師 (minister) と呼ばれる人びとである。監督制批判の対象となった主教 (bishop) で代表されるイギリス国教会の聖職者の特権的身分は、ミルトンの構想するキリスト共同体の観念においては否定される。キリスト信者を司牧するのは、監督ではなく、長老・執事であるべきだというのがかれの信念だったからである。では、王はキリスト共同体のなかでどんな位置を占めるのか？ミルトンが頭のなかで描いている「王」とは「霊的な意味での教会のかしら」でないことは言うまでもない。強いて言えば「国家のかしら」であって、ある種の権能を神から授かっているとはいえ、王自身は、本来、一個のキリスト信者以外の何ものでもないミルトンは考えていた。次の二つの引用を見れば、ミルトンがキリスト共同体の構成要素としての王には一定の権能—「王権」—が付与されていることを是認していたのは明らかである。

Alas, sir! a **commonwealth** ought to be but **one huge Christian personage, one mighty growth and stature of an honest man**, as big and compact in virtue as in body; for look *what* the grounds and causes *are* of single happiness to one man, the same ye shall find them to a whole state, as Aristotle, both in his Ethics and Politics, from the principles of reason, lays down: by consequence, therefore, *that which is good and agreeable to monarchy*, will appear soonest to be so, *by being good and agreeable to the true welfare of every Christian*; and *that which can be justly proved hurtful and offensive to every true Christian*, will be evinced to be alike *hurtful to monarchy*: for God forbid that we should separate and distinguish *the end and good of a monarch*, from *the end and good of the monarchy*, or of *that*, from **Christianity**.<sup>27</sup>

[Because] things simply pure are inconsistent in the mass of

nature, nor are the elements or humours in a man's body exactly homogeneal; and hence the best-founded commonwealths and least barbarous have aimed at a certain mixture and temperament, partaking the several virtues of each other state, that each part drawing to itself may keep up a steady and even uprightness in common.

There is no civil government that hath been known, no not the Spartan, nor the Roman, though both for this respect so much praised by the wise Polybius, more divinely and harmoniously tuned, more equally balanced as it were by the hand and scale of justice, than is **the commonwealth of England**; where, under a free and untutored monarch\*, **the noblest, worthiest, and most prudent men**, with full approbation and suffrage of **the people**, have in their power *the supreme and final determination of highest affairs.*<sup>28</sup>

最初の引用文では、キリスト共同体では君主と人民とが「利害」を共有すべきことが説かれている。キリスト教が両者を霊的に結びつける役割をしているのは言うまでもない。いかにもミルトン的と思われるのは、キリスト共同体とはキリスト信者としての個人をそのまま巨大なスケールに拡大したものにほかならないという着想だ。そして、個体としての個人が異なった要素、もしくは「体液」から形成されているように、この共同体も異なった要素から形成されているからには、それらの要素は、個人におけると同様に、「神聖かつ調和的に」「均整のとれた」形で結合されていてしかるべきであって、その点では「自由で、陶冶されていない」君主の、いわば形式的な統治のもとで、人民の完全な賛同と支持をえた「最も高貴で、最もすぐれた、最も賢明な」人びとが、国政について最高かつ最終的な裁断を下す仕組みになっている英国の国制にまさるものはない、とミルトンは断言する。僭主制でもなく、寡頭制でもなく、

衆愚制でもなく、それらの欠点を排除し、長所・美点を具備している「混合政体」をミルトンは是としているのである。ここで興味ぶかいのは、かれが「自由で、陶冶されていない」君主の存在を容認していることである。「自由で、陶冶されていない」君主がキリスト教徒にふさわしくない振る舞いをする場合には、君主の「自由」にある種の倫理的制約を課し、キリスト教的陶冶をほどこすのは、「最も高貴で、最もすぐれた、最も賢明な」人びと、すなわち牧師（＝長老・執事）の役割であると（上の引用文では明言されていないが）ミルトンは考えていたのではあるまいか。筆者があえてそう想定するのは、ミルトンが牧師（＝長老・執事）に王を含めての一般信徒（王といえども、王権を付与されている点を除けば、一般信徒の一人であることに変わりはないので）の教導をゆだねていたことが次の引用文から窺われるからである。

Now if conformity of church-discipline to the civil be so desired, there can be nothing more parallel, more uniform, than when under **the sovereign prince\***, **Christ's vicegerent**, using the sceptre of David, according to God's law, **the godliest, the wisest, the learnedest ministers** in their several charges have *the instructing and disciplining of God's people*, by whose full and free election they are consecrated to that holy and equal aristocracy.<sup>29</sup>

以上の諸引用でミルトンが、この時期、かならずしも王権を否定していないことが明らかになったであろう。それどころか、王権そのものに反対する意見はむしろ監督制のかなめをなす主教の側から出る可能性があるとなさえミルトンは考えていたのである。次の引用をご覧いただきたい。

---

\* 前ページ、およびこのページの引用文中の君主(monarch/ prince)という用語は、さしあたり王(king)と読みかえてよい。

Whilst the priest's office in the law was set out with an exterior lustre of pomp and glory, kings were ambitious to be priests; now **priests**, not perceiving the heavenly brightness and inward splendour of their more glorious evangelic ministry, with as great ambition affect to be **kings**, as in all their courses is easy to be perceived.... Nay more: *have not some of their devoted scholars begun*, I need not say to nibble, but *openly to argue against the king's supremacy? Is not the chief of them accused* out of his own book, and his late canons, *to affect a certain unquestionable patriarchate, independent, and unsubordinate to the crown.*<sup>30</sup>

9

これまでの論述を通じて筆者が強調したかった論点を整理してみよう。第一に、論争家としてのミルトンの最大の特徴は、かれが監督制を糾弾する際に、古典修辞学と聖書の知識を最大限に駆使したということである。第二に、かれの目的は、ヨーロッパ大陸で成果をあげつつあるプロテスタント運動がイギリスで停滞している原因を監督制にありとして、これを廃止して、代わりに長老制を取り入れるべきことを確固たる信念と福音主義的情熱をもって主張したことである。第三に、しかしながら、かれの信念と情熱は 聖書の本文の独善的解釈に基づくプロテスタント信仰を、いわば盲目的に信奉していたことに由来するものであった。この最後の論点は、イギリス革命期の政治的、宗教的状况についての冷静で客観的な認識の欠如を示すものだという意味で重要である。それは監督制批判文書における論争家としてのミルトンの限界を示すものだ、というのが拙論の帰結である。

以上が拙論の主要な論点であるが、最後に、拙論のいわば「付け足し」

(cauda) として、イギリス革命の初期から中期（クロムウェル政権の成立前後）にかけてミルトンの政治・宗教思想がどのような変貌をとげたかという問題について、筆者なりのおおまかな見取り図を提示しておきたい。拙論の中では言外に暗示しておくにとどめておいたが、それは、概略、以下の通りである。ともに聖書に根拠をもつ二つの体制（一方は長老制、もう一方は王制）がミルトンの思想のなかで、いわば平和的共存を保っていたのは、せいぜい革命の初期の段階にかぎられるのであって、革命の急速な展開のなかでミルトンは両者の廃棄を余儀なくされた。その経緯について詳論を試みるのは拙論の範囲外であるが、国制のあり方、教会のあり方、といった根本問題についてミルトンの思想自体が一大転換を遂げたことを示す証拠の一部を末尾の付録 **Appendix** に提示しておく。そこで暗示されている結論は、イギリス革命という政治状況の激変のなかで（そして王制復古の後までも）、ミルトンは政治的には共和制、宗教的には信仰の自由（ただし、カトリックについては非寛容）を擁護する姿勢を貫き通したということである。その経緯と帰着をどう評価するかについては、他日、稿を改めて考察したい。

## Notes

<sup>1</sup>Christopher Ricks, *Milton's Grand Style*, Oxford University Press, Oxford, 1963, p.22.

<sup>2</sup>Donald L. Clark, *John Milton at St. Paul's School*, Columbia University Press, 1948; repr. Archon Books, 1964.

<sup>3</sup>Milton, *Of Reformation in England*, in *Milton's Prose Writings*, with an Introduction by K. M. Burton, Everyman's Library, 1958, pp. 3-4. 以下、本文書からの引証にはこの版を用い、*Of Reformation in England*, 3-4 のように ページ記号を略す。引用文中の太文字やイタリックスは強調・対照・その他の目的で筆者が施したもの。以下同様。なお、引用文には日本語訳を添えない。

<sup>4</sup>末尾の付録 **Appendix** は、Notes に収めるには長すぎたり、煩瑣でありすぎたりする場合を考慮して付け足したものである。本文との照応は厳密ではないが、ある程度、参考にはなろう。

<sup>5</sup>付録 **Appendix** を参照。

<sup>6</sup>Milton, *The Reason of Church Government*, in *Milton's Prose*, selected and edited with an Introduction by Malcolm W. Wallage, Oxford Classics, 1925, p. 66. 以下、本文書からの引証にはこの版を用い、*The Reason of Church Government*, 66. のようにページ記号を略す。

<sup>7</sup>Morris W. Croll, "The Baroque Style in Prose," in *Literary English*

*Since Shakespeare*, ed. George Watson, Oxford University Press, London, Oxford, & New York, 1970, pp. 84-110.

<sup>8</sup>Milton, *An Apology for Smectymnuus*, in *Milton's Prose Writings*, with an Introduction by K. M. Burton, Everyman's Library, 1958, p. 57. 以下、本文書からの引証にはこの版を用い、*An Apology for Smectymnuus*, 57 のようにページ記号を略す。

<sup>9</sup>George Williamson, *The Senecan Amble*, 1966, passim.

<sup>10</sup>*An Apology for Smectymnuus*, 97.

<sup>11</sup>*Ibid.*, 57.

<sup>12</sup>*Of Reformation in England*, 4-5.

<sup>13</sup>*Ibid.*, 23.

<sup>14</sup>*Ibid.*, 24.

<sup>15</sup>*Ibid.*, 33.

<sup>16</sup>*The Reason of Church Government*, 106-107.

<sup>17</sup>*Of Reformation in England*, 10.

<sup>18</sup>*Ibid.*, 9.

<sup>19</sup> *An Apology for Smectymnuus*, 55-56.

<sup>20</sup> *Ibid.*, 56-57.

<sup>21</sup> *The Reason of Church Government*, 107.

<sup>22</sup> *Of Reformation in England*, 23-24.

<sup>23</sup> *Ibid.*, 16.

<sup>24</sup> *Ibid.*, 23.

<sup>25</sup> *Ibid.*, 10.

<sup>26</sup> *The Reason of Church Government*, 67-68.

<sup>27</sup> *Of Reformation in England*, 26-27.

<sup>28</sup> *Ibid.*, 42.

<sup>29</sup> *Ibid.*

<sup>30</sup> *Ibid.*, 38-39.

## 付録 Appendix

### 序論の目的 — アリストテレス

序論の最も必要不可欠な、そしてそれ固有の働きは ... 弁論が目的として  
いる主題が何であるかを明らかにすることにある。 — 『弁論術』, III,14.

### 弁論家に要求される資質と訓練 — キケロ

万般の豊かな知識は言葉の豊かさを生むからであり、語る事柄に高尚さが  
あれば、言葉にはおのずからある種の輝きが生まれるからである。語ろう  
とする者、あるいは書こうとする者は、子供の頃に自由人にふさわしい教  
育と学問を施された者でありさえすればよく、さらに、情熱に燃え、天性  
の助けを得、一般的・包括的な主題に関する非限定的問題の論争の修練を  
積み、誰よりも詞藻を凝らした作家や弁論家を範に選んで知悉し模倣し  
さえすればよいのである。 — 『弁論家について』, III,125.

### 弁論におけるリズムと均整 — キケロ

弁論では一連の言葉（すなわち完全文）の語の配列の仕方によって詩その  
ものになってしまうのはよくないことであるが、なおかつ、その配列が詩  
的なリズムをもって終結し、均整のとれた、完結したものでなければなら  
ないという点である。弁論家と弁論に不慣れな者や無知な者とを区別する  
... 最大の相違点は、弁論の素人の場合には、言葉の順序はどうでもよく、  
口から出任せに、言えるかぎりのことを言い、（リズムや均整といった）  
美的な配慮によってではなく、息が続くかどうかによって語る範囲が決め  
られるのに対して、弁論家の場合には、言葉をつなぎ合わせて思想（意味  
内容）を言い表そうとするとき、その思想が、開放的（散文的）であると  
同時に、規律的（詩的）でもある、ある種のリズムを伴って語られるよう  
にする、という点なのである。 — 『弁論家について』, III,175.

### 弁論家の語り口 - キケロ

まさにこうした事柄 [市民の慣行や人々の慣習に関するもの、あるいはまた、生活の習いや国家の制度、市民社会や人々の常識、その本性や倫理的な性格といった事柄] に関しては、弁論家は、法の原理や法律や市民社会というものを創成した人々が語ったような語り口、つまり、簡潔にして簡明な語り口で弁じるべきであり、長々と続く煩瑣な議論や、不毛な言葉の論争は用いるべきではないとわたしは思うのである。[登場人物マルクス・アントーニウスの発言] - 『弁論家について』, II,68.

### 脱線 - クウィンティリアヌス

I admit ... that this form of digression can be advantageously appended, not merely to the *statement of facts*, but to each of the different questions or to the questions as a whole, so long as the case demand, or at any rate permit it. Indeed such a practice confers great distinction and adornment on a speech, but only if the digression fits in well with the rest of the speech and follows naturally on what has preceded, not if it is thrust in like a wedge parting what should naturally come together.... Again a digression may be advantageous if after setting forth the services rendered by your client to his opponent you denounce the latter for his ingratitude, or after producing a variety of charges in your statement, you point out the serious danger in which the advancement of such charges is likely to involve you. But all these digressions should be brief. - *Quintilian II*, Books IV-VI (Loeb), 123, 125.

### ミルトンの「誹謗的弁論」 - 辛辣な皮肉・あてこすり

キリストは祭司であると同時に王であるからには、あらかじめ大祭司に擬せられると同時に王に擬せられて然るべきだとし、だからキリストが到来するばあいに、ひとつの型をとったとすれば、また他の型をとって悪いはずはない、と主教 [アンドルーズ主教] は強弁するのである。なんとすばらしい神学論の実例よ！ なるほどそのためにこそ、国をあげて年六千ポンドの大金を一主教職にささげるのである。

— 『教会統治の理由』, I, 41.

### プロテスタントの歴史認識

[When] I recall to mind at last, after so many dark ages, wherein the huge overshadowing train of error had almost swept all the stars out of the firmament of the church; how the bright and blissful Reformation (by divine power) struck through the black and settled night of ignorance and antichristian tyranny, methinks a sovereign and reviving joy must needs rush into the bosom of him that reads or hears; and the sweet odour of the returning gospel imbathe his soul with the fragrancy of heaven. Then was the Bible sought out of the dusty corners where profane falsehood and neglect had thrown it, the schools opened, divine and human learning raked out of the embers of forgotten tongues, the princes and cities trooping apace to the new erected banner of salvation; the martyrs, with the irresistible might of weakness, shaking the powers of darkness, and scorning the fiery rage of the old red dragon.

— *Of Reformation in England*, 6.

### 監督制 vs 長老制

Behind this passage [referring to the epistles of St. Paul to Timothy

and Titus] was a long struggle between its episcopal interpreters, who regarded it as actually constituting *Timothy* and *Titus* as bishops in the primitive church, and the Presbyterians, who accepted Calvin's view that in the early church there were no distinctions between priests and bishops, and that "Churches were governed by the common counsell of the Elders" until bishops were set up to check growing dissensions. Hence, said Calvin, we should "let the Bishops know, that they are above the Priests, rather by custome than by the truth of the Lords disposing." (Commentary on Titus i, 7.)

— *John Milton Complete Poems and Major Prose*, ed. M. Y. Hughes, 645, note 34.

ミルトンの思想的変貌 — 長老制への幻滅から批判へ

[But] when, at length, some presbyterian ministers, who had formerly been the most bitter enemies to Charles, became jealous of the growth of the Independents, and of their ascendancy to the parliament, most tumultuously clamoured against the sentence and did all in their power to prevent the execution, though they were not angry, so much on account of the act itself, as because it was not the act of their party; and when they dared to affirm that the doctrine of the protestants, and of all the reformed churches, was abhorrent to such an atrocious proceeding against kings; I thought that it became me to oppose such a glaring falsehood....

— *The Second Defence of the English People*, 346.

THE TENURE OF KINGS AND MAGISTRATES: PROVING THAT IT IS LAWFUL, AND HATH BEEN HELD SO THROUGH ALL AGES, TO CALL TO ACCOUNT A TYRANT, OR WICKED KING, AND AFTER DUE CONVICTION, TO DEPOSE, AND PUT HIM TO DEATH, IF THE ORDINARY MAGISTRATE HAVE NEGLECTED, OR DENIED TO DO IT....

— *The Tenure of Kings and Magistrates*, 186.

[But] this I dare own as part of my faith, that if such a one there be, by whose commission whole massacres have been committed on his faithful subjects, his provinces offered to pawn or alienation, as the hire of those whom he had solicited to come in and destroy whole cities and countries; be he king, or tyrant, or emperor, the sword of justice is above him, in whose hand soever is found sufficient to avenge the effusion and so great a deluge of innocent blood.

— *Ibid.*, 190.

It being thus manifest that the power of kings and magistrates is nothing else but what is only derivative, transferred, and committed to them in trust from the people to the common good of them all, in whom the power yet remains fundamentally and cannot be taken from them without a violation of their natural birthright..., it follows from necessary causes that the titles of sovereign lord, natural lord, and the like, are either arrogancies or flatteries....

— *Ibid.*, 192.

[ We ] ... may be ashamed not to discern ... that a parliament is by all equity and right above a king, and may judge him, whose reasons and pretensions to hold of God only, as his immediate vicegerent, we know how far-fetched they are, and insufficient.

— *Eikonoklastes*, 211.

Those objected oaths of allegiance and supremacy we swore, not to his person, but as it was invested with his authority; and his authority was by the people first given him conditionally, in law, and under law, and under oaths also for the kingdom's good, and not otherwise; the oaths then were interchanged, and mutual; stood and fell together; he swore fidelity to his trust (not as a deluding ceremony, but as a real condition of their admitting him for king....

— *Ibid.*, 212-213.

## Select Bibliography

*Achievement of the Left Hand*, ed. by Michael Lieb and John T. Shawcross, The University of Massachusetts Press, 1974.

Clark, Donald Lemen, *John Milton at St. Paul's School*, Archon Books, 1964 (first published by Columbia University Press, 1948).

*Complete Prose Works of John Milton*, Vol. I (1624-1642), ed. Don M. Wolfe, Yale University Press, 1953.

Croll, Morris W., *Style, Rhetoric, and Rhythm*, ed. Patrick, et al.,  
Princeton University Press, 1966.

*John Milton Complete Poems and Major Prose*, ed. Merritt Y.  
Hughes, The Odyssey Press, New York, 1957.

Krapp, George Philip, *The Rise of English Literary Prose*, Frederick  
Ungar Publishing Co., New York, republished 1963 (first  
published 1915).

*Literary English Since Shakespeare*, ed. George Watson, Oxford  
University Press, London, Oxford, & New York, 1970.

*Milton's Prose Writings*, with an Introduction by K. M. Burton,  
Everyman's Library, 1958.

*Milton's Prose*, selected and edited with an Introduction by Malcolm  
W. Wallace, The World's Classics, 1925.

Ricks, Christopher, *Milton's Grand Style*, Oxford: Clarendon Press,  
1963.

Thomson, J. A. K., *Classical Influences on English Prose*, George  
Allen & Unwin Ltd, 1956.

Williamson, George, *The Sececan Amble: A Study in Prose Form  
from Bacon to Collier*, University of Chicago Press, 1966.

**ミルトン散文著作（日本語訳）**

ジョン・ミルトン『イングランド宗教改革論』, 原田純, 新井明, 田中浩  
訳, 未来社, 1976.

——『教会統治の理由』, 新井明, 田中浩 訳, 未来社, 1986.

——『離婚の教理と規律』, 新井明, 佐野弘子, 田中浩 訳, 未来社, 1998.

——『離婚の自由について』, 新井明, 松並綾子, 田中浩 訳, 未来社, 1992.

——『教育論』, 秋市元宏, 黒田健二郎 訳, 未来社, 1992.

——『四絃琴』, 辻裕子, 渡辺昇 訳, リーベル出版, 1997.

——『言論の自由』, 石田憲次, ほか 訳, 岩波書店, 1953.

**古典修辞学関係著作（日本語訳）**

アリストテレス『弁論術』, 戸塚七郎 訳, 岩波文庫, 1992.

キケロ「修辞学Ⅰ」, 『キケロ選集』6, 片山英男 訳, 岩波書店, 2000.

——「修辞学Ⅱ」, 『キケロ選集』7, 大西英文 訳, 岩波書店, 1999.

## (要旨) 論争家としてのミルトン

### —— 監督制批判文書を中心として

論争家としてのミルトンの著作は (1) 第1期 (1641-42)、(2) 第2期 (1643-45)、および (3) 第3期 (1649-60) に分けて考察するのが便利であろう。

第1期は *Of Reformation in England* から *An Apology for Smectimus* にいたる一連の「監督制批判」文書である。第2期は *The Doctrine and Discipline of Divorce* から *Colasterion* にいたる一連の「離婚論」文書と言論の自由を主張した *Areopagitica* である。第3期は *The Tenure of Kings and Magistrates* から *The Ready and Easy Way to Establish a Free Commonwealth* にいたる「共和制弁護論」である。拙論では、このうち第1期を特徴づけるミルトンの論争術の特質を彼の宗教的信念との関連において考察する。

「監督制批判」文書はおおむね古典修辞学でいう「荘重な文体」(grand style) の見本とも言うべきものではあるが、論理的構造は、透明なものから不透明なものまで、さまざまである。その錯綜した文章構造は、ミルトン以後、イギリス散文の主流をなした「平明な文体」(plain style) とは際立った対照をなし、今日の読者には、少なからず抵抗を感じさせるものであろう。立論の根底には、プロテスタント特有の歴史認識と聖書観が認められる。

ミルトンは、この時期、王権に寄生して世俗的権力をほしいままにする監督制に対して仮借なき攻撃の矛先を向けたが、王権自体についてはこれを容認していたと思われる。しかし、*Of Prelatical Episcopacy* に見られる通り、彼が監督制に対抗する教会統治方式として長老制を支持していたことも明らかである。第1期、ミルトンの思考の中で共存していたこの二つの構想が、第2期から第3期にかけて彼の思想が急速に急進化していく過程で廃棄を余儀なくされたのは、皮肉な成り行きであった。

(Abstract) **Milton As a Polemical Writer — With Special  
Reference to His Anti-episcopal Tracts**

The polemical writings of John Milton may be considered in terms of the three periods in which they were composed: (1) 1641-42, (2) 1643-45, and (3) 1649-60. The first period is represented by a series of anti-episcopal tracts from *Of Reformation in England* to *An Apology for Smectimnuus*; the second by a series of tracts on divorce from *The Doctrine and Discipline of Divorce* to *Colasterion* — and two other tracts (*Of Education* and *Areopagitica*); the third by political pamphlets defending regicide and republicanism against attacks from both within and outside of England. The present paper focuses on the first of these periods and considers certain rhetorical features of Milton's anti-episcopal tracts in relation to two forms of religious and political organization — episcopalianism and monarchy — both of which he was espousing vigorously in those tracts.

The paper suggests that Milton, though a classicist in his stylistic technique, was a thorough Protestant, basing his argument on the principle of "the Scriptures alone". The paper also suggests that Milton the politico-religious writer had to undergo a significant change of mind as he moved from the second to the final phase of his polemical career. (That change, however, is only suggested at the end of the paper by a mention of the fact that, with the advance of the Revolution, he was forced to abandon his initial leanings on the Scriptures and adopt non-Biblical ideas — more radical, and more revolutionary, than is Scripturally warranted — along the lines of republicanism and religious toleration, except, however, for the Catholics).